

マッセ・市民セミナー（北摂ブロック）

「主体性と意欲を育てる保育環境

～人への安心・信頼を土台に～」

開催日 平成24年6月7日（木）

会 場 摂津市立コミュニティプラザ
コンベンションホール



「主体性と意欲を育てる保育環境

～人への安心・信頼を土台に～

樋口 正春 氏（保育創造セミナー代表）



はじめに

こんにちは。私どもの保育所は、千葉県美浜区の埋め立て地に作られた保育所です。実際には海岸までは遠い所なのですが、そこにある「まどか保育園」と言います。現在、定数90名で100名ぐらいいますが、私はそこの理事長として、10年ぐらいずっと保育実践を続けています。

園長は別にいるのですが、それ以外にたくさんの保育所を指導するというところで、この4月から東京都練馬区で民営化される保育所に手を挙げたところ、私たちが選ばれ、今、その新しい保育所で非常に苦勞しています。予想以上の大変さと、予想していたほど大変ではないという部分、両方抱えながら4月からスタートして、今、ちょうど2か月過ぎて、かなり落ち着いてきたという感じがしています。

公立の保育所には今まで関わったことがあるのですが、全く違う保育所をお引き受けすることになって、保育というものでこんなにも子どもの育ちが違うのかと実感しています。これは良いとか悪いとか単純には言えない部分があるのですが、今日お話することと、いろいろな面で関係していくと思っています。資料で「こども園」という新システムについて読んでいてもなかなか難しいというのは、言葉では保育の質を高める、保育者の質も高めていくと頻繁に言われているのですが、保育の質という中身が非常にあいまいです。なぜなら全く定義がされていないからです。ですから、この保育所は質がいいとか、悪いとか、誰がどう判断するのだろうかと思ってしまいます。言葉というのは便利でやっかいなのです。何となく共通で分かったような気分になりますが、保育の質を問われたときに、誰もきちんと答えられないのが現状ではないでしょうか。

もし保育の質というものが何らかの形で外から判断できるとすれば、それはそこに育っている子どもたちではないかという気がします。子どもがどう育っ

ているかということが、その保育の質を表しているのではないかと考えると、保育の質というのはなかなか厳しい問題を抱えていると思わざるを得ません。

1. 重要な生活リズムの形成

今日は特に安定した人間関係の重要性とか、子どもたちが学校に行くまでどんなことを育てていかなければいけないかということをお話ししたいと思います。逆に言うと、今、学校で非常に困っている問題があるわけです。学校の先生たちにもノイローゼやうつ病になるような方たちが多く出てくるぐらいに、どうも学校の現場が荒れていて、子どもたちが落ち着いていないという状態が現実の問題としてあるわけです。

この前も知り合いの小学校の先生が2年生の担任をしていて、この4月に退職したのです。本当に精神的にやられてしまったというか、これ以上やっていると本当に病気になるそうだから辞めると言って辞めたのです。彼女は幼稚園の経験もあるものですから、幼稚園の保育の中で育った子どもたちをある程度見ていて、学校に行ってみたらいろいろな所から子どもたちが来ているということで、全然違うというのがすごくショックだったということです。2年生の子どもに「今から国語の時間だから教科書を出して」と言うと、「何で」「面倒くさい」とかいう声が返ってくるといいます。とにかく言葉というものが全く子どもに届かない、通じない。子どもがうるさくて先生の話聞いていないというのではなく、言葉というものが本当に無力になってしまっていて子どもとのコミュニケーションができないということです。「国語の授業だから教科書を出しなさい」と言うと、小学校の子どもが「面倒くさい」とか「何で出すの」という言葉が返ってくるのが今の学校なのかと思うと、驚きます。

ほかに、うちの保育園から卒園して小学校に行く子どもたちの保護者が学童保育を見学に行って、「恐竜の島みたいな所にうちの子どもは行かなければいけない」「大丈夫かな」みたいなこともあります。今、「小1プロブレム」という言葉があります。1年生から既に話が聞けないとか、座ってられないとか、全くルールが守れないとか、人間関係がうまくつくれなくて、自己中心的で気に入らなかつたらすぐにキレるとか、そういう状態を表す言葉です。これは今から13年ぐらい前にマスコミに登場してきた言葉なのですが、そういう問題が起きているということです。

実際にそういう現場を見てみると、これは小学校1年生の問題ではなく、保育の問題なのだということ強く感じます。4月から私たちが引き受けた保育園の子どもたち、年長児を見ていると、1時間かかっても食事の半分ぐらしか食べられないとか、絵本を読むのに集まっても30分ぐらしかかるとか、やっと集まって本を読もうと思っても、なかなか静かにできなくて、すぐに前の子を後ろから蹴飛ばしたり、見えないから「どけ！」と叫んでみたりで、始まるのに10分ぐらいかかってしまう。それで1～2週間目ぐらいにほとんどの職員の声が枯れてしまうぐらいなのです。叫んでいないのですが、子どもたちに何かを言い続けていないと落ち着かないわけです。彼女たちは、自分たちが今まで経験したことがない状態にぶち当たって、同じ年代の子どもたちがなぜこんなに違うのかにショックを受けたわけです。

しかし、それは子どもが悪いわけでもないし、特別に問題のある子どもばかりが集まっているわけでもないのです。特に年長になって1歳、2歳、3歳、4歳と4年間も同じ保育士さんが持ち上がってきたわけだから、そういう意味では関係などもできているのではないかと思うのです。一番驚いたのは4月から一斉にいなくなってしまった公立の先生たちについて、その名前やどこに行っただのか、何をしているのかを聞く子どもがほとんどいないというのは一体何なのだろうと思いつながら、いろいろなショックを受けながらスタートしました。

年長なのに乳児と同じぐらいの食事の時間で半分ぐらしか食べられないので、2週間目には思い切って量を半分ぐらいにしてみたのですが、半分にしても1時間ぐらしかかるという状態で、どうすればいいのだろうという感じです。なぜそれができないのか、公立のときはどうしていたのかと引き継ぎのときに話を聞くと、食べられないから、最後は先生方が子どものところを回って、お皿からスプーンですくって子どもの口にどんどん押し込んで、それで何とか終わっていたということでした。

「絵本は？」と言うと、絵本は読んでいたけれども、公立は組合の問題なのか、11時半から最初の人は休憩に入るので、子どもが全部集まらなくても、2人でも3人でもとにかく読み始めて、保育者も11時半から休憩に入ってしまうという状態がずっと続いてきたといいます。

しかし、沖縄のエイサーや荒馬など、行事でやるものは何か月間かけて練習をするのでとても上手だそうなのですが、私たちはそういうのをやめたいと言うと、保護者から反対が出るのです。また、毎日A4の紙を半分の大きさに

写真を3枚入れた「今日の活動」というのをプリントして、裏側は保護者が書く欄が3分の2と、保育園が書く欄が3分の1ぐらいにした連絡帳を書いて、それに穴を開けてバインダーに止めてかばんに入れて返すということをやっとやってきているのです。「よくこういうのを公立のときはやっていたね」という話をしたら、午後からはほとんどパート保育士に任せて、自分たちは連絡帳作りだけをやっていただけでできたというのです。私たちは保育を放っておいてそれはできないから、結局は休憩時間も取れない状態でやるしかないとか、昼ご飯も食べる暇がないとか、そんな状態でした。

保育の形態があまりにも違うので驚きながら、今まで、外から見たら全く何も分からない状態でやっていたのだと思います。現実の問題としては、エイサーなどいろいろなことができるのだけれども、生活のごく当たり前のこと、今、先生が話しているから黙って聞くとか、今は本を読むからここに座ろうとか、ご飯のときのだからご飯を食べようとかができないのです。ご飯を食べるという生きるための最も基本的なことすらきちんとできないのは、実は簡単な能力が育っていないということが分かるのです。

その育っていない能力とは、「今は何をするとき」という感覚です。これがほとんどできていません。つまり「今は何をするときか」というのは、今は先生が本を読んでいるのだから座って聞くときとか、今はご飯食べるときとか、今はおやつを食べるときとか、これが済んだら外に遊びにいくとか、1日の生活の流れ、つまり生活リズム、保育の言葉で言うとりズムなのですが、これがきちんとできていないと、子どもは今何をするか集中できないし、次に何をするか分からない、今、何をしたいのか分からないのです。

2. 死を招いた保育

昨年出版されて保育の世界で大変に話題になった『死を招いた保育』という本があります。読まれていない方はぜひお勧めしますが、ひとなる書房というところから出ています。

2006年に埼玉県上尾市の公立の上尾保育所で、4歳の男の子が保育時間中に遊んでいました。かくれんぼをしていたらしいのですが、見つからずに熱中症で亡くなってしまったのです。保育所の中で子どもが死んでしまったという大変な事故を、裁判からずっとの記録を基に猪熊さんという方が書かれたのです。

が、これは本当に一度、ぜひ読むべき本だと思います。

上尾保育所は公立で120名定員の保育所です。上尾市はかなり保育に力を入れており、上尾市の保育のレベルはかなり高いという評判だったらしいのですが、僕はその本を読む限り、保育のレベルとは一体何なんだという思いを持ちました。上尾市長は裁判で子ども1人当たり年間170万円というお金を使っているの、上尾の保育はレベルが高いのだとおっしゃっているのです。金額の問題ではないと思うのですが、170万円はかなり多いです。千葉市で110万円ですから、170万円も1人の子どもにお金をかけているのか、すごいな、と思うのですが、子どもにかけているといっても、その中身の大半が人件費なのです。運営費（人件費）と給食費と、あとはおもちゃなどを買う教材費（雑費）という三つで成り立っているの、何にどれだけ使われているかが重要です。

保育の質を上げるために一番手っ取り早いのが保育士の給料を上げることだと本当に思うのですが、もっと待遇のいい仕事にしていかないと良い保育士さんはなかなか集まりません。今現在で1万人足りないのですが、5年後には7万人足りない試算されているので、今度は保育士の試験をもっと甘くしようと国は考えています。

ということは、ますます質が低下する可能性もあるわけです。なぜみんな保育士にならないのか、学校で勉強して実習まで来るのですけれども、募集しても来ないという状態です。また、大都市圏は今、どこも保育士が足りないというのは深刻な問題です。待機児を入れてあげたいし、部屋もあるけれども、保育士がいませんという状態があちらこちらで出ています。

4月、5月ぐらいが重要というか、2か月ぐらいで辞める新人もたくさんいるという状態で、保育もなかなか厳しい世界になってきているわけです。上尾保育所の『死を招いた保育』と今、自分たちが引き受けた保育所とで内容的に全く重なってきて怖くなったのですが、やはりその保育所でも、例えば朝出てきて、その日の天気で「今日、どうする？ 散歩に行く？ 行かない？」みたいなものが保育士の間でその日に話し合われて、保育所の1日の流れが決まるということがあります。つまり、子どもも行って見て、今日、保育所で何があるのかは、その日の先生の都合や気分や天気などのいろいろなことで決まるから、今、何をするなどは考えても分からないわけです。昨日と同じではないわけですから、何日も繰り返されて初めて、今、何をする時間かが分かってくるのですが、それが難しいわけです。

外出から帰ってきたら、部屋の中でも外でもホールでも廊下でも、どこでも好きな所で遊んでいいよという自由保育があるのです。これは完全に放任なのですが、子どもの動静を誰もつかんでいないという状態で、結果として廊下やホールで遊んでいて、かくれんぼして廊下の隅っこにあった本棚の下に入った子どもが死んでしまったということです。しかし、それを誰も見ていない状態です。先生たちは「外にいるときも中はできるだけ見るようにしています。中にいる人はできるだけ外を見るようにしています」と裁判で言っているのですが、現実にはそうやって廊下やホールで遊んでいる子どもを誰も見ていないということがあるのです。また、正規の職員がどんどん辞めていって、パートや臨時採用の人などのいろいろな職種の人たちがおり、1日何人もが時間単位で入れ替わって保育をしていくので、情報共有がなかなか難しいのです。

きちんとお互いにどういったことが大事かを伝えなければいけないのですが、職員会議を開くのが難しいといったことが保育の現場でどんどん起こってきている中で、保育の質を問われてくると、こちらとしては「保育の質を上げるために何が大事な？」と逆に問い掛けていきたくなるということがあるわけです。

制度の問題ばかり取り上げても、保育は少しも前に進まないわけです。毎日始める前に子どもたちがどうそこで過ごすか。一番長い子どもたちは6年近い時間を保育所で過ごすわけです。そう考えたときに、保育はどうあるべきかはとても重要なわけです。先ほど言った「今、何をするときか」「ここは何をする所」という二つの感覚が0歳でできてくれれば一番ありがたいと思うのですが、少なくとも6歳までにはぜひ身に付けておかないといけません。

だから結局、学校に行っても、今は授業中だから部屋にいるとか、お部屋は走り回ったり騒いだりする所ではないとか、今は先生が話しているので自分は黙って聞くとか、今は何をするとき、ここは何をする所ということが全く身に付いていない子どもが大量生産されて、どんどん学校に送り出されています。先生がいくら大きな声を出しても、子どもは聞いていないという状況が現実には起こっているのです。

私たちは自分の保育園の子どもはどうかと考えています。今は何をするときかがきちんと分かってそれをしているのかな、私たちの話をきちんと聞いてくれるかな、生活の中で基本的なルールは守れているのかなといつも気にしています。そして、けんかすることや競争することもあるけれども、仲良くしたり、

人と一緒にいることは、とてもうれしい、楽しいということを感じてほしいのです。1日の生活時間の大半を過ごしている保育園で、日々そういう生活をしているのかどうか、保育士が子どもを大きな声で怒鳴ったりしかったりばかりしていないだろうか。

私たちの保育園では、子どもをしかるということはあまりないので、たまにいろいろな子をしかっている姿を見ると、あなたがこんなふうに変えたらしくらなくてもいいのだけれどもと思ってしまいます。しかっていることの8割ぐらいは大人の方に原因があるなと思うことばかりです。

極単に言えば、かみつきもそうです。大人がもっときちんと子どもを見ていればかみつかなくて済むという部分もあります。だからすべて子どもに責任があるのではなく、むしろ子どもが今、大変な状況というのは、もう一回保育を根本的に見直していかないと、子どもの問題がしっかりとらえられないということです。

3. 保育を通して育てたい五つの力

今日、皆さんにお渡ししている資料は、基本的に乳児保育について書いた部分です。実はもう一つ資料を作ろうと思っています。「保育を通して育てたい五つの力」という話があるのですが、これを最初にお話しします。

今、保育目標はいろいろあると思うのですが、日本の保育目標は大ざっぱに言えば「明るく素直で元気な子」という感じとか、「心の優しい子」とか、「最後まで頑張ってやり通す子」とか、「誰とでも仲良くできる子」とか、いろいろあります。しかし、どれも非常に抽象的で、観念的で分かりません。

今、私たちはこの五つの力を育てたいと考えています。まず、1番目に人の話を聞くという力、2番目に集中力、3番目にルールを理解して守れる、4番目に良い人間関係をつくる。つまり、仲良くしたり、思いやったり、協力したり、人のために何かをしてあげたい。人と一緒にいるということはとても楽しいという関係です。5番目に五感をできるだけたくさん使わせてあげたいのです。感じるということは、実は「感じる、考える、行動する」とつながっていく一番初めの重要な感覚で、感じないと考えないし、考えなければそこには良い行動が出てこないというように、この五つの力を育てたいと思います。

現実に皆さんが自分の保育所の子どもたちを見たときに、この五つはどう

なっているか。きちんと話が聞けるようになってきているかどうか、あるいは、一つのことにある程度集中する力があるかどうか。お昼ご飯などは大体20分あれば食べられます。集中して、お話をしないできちんと食べるという気持ちを持って食べていけば、大丈夫です。0歳、1歳はもっと早い話ですね。0歳、1歳は生きるために食べている時代ですから、献立にもよりますが、大体10～15分で食事が終わるとというのが普通です。

気が散ったり遊んだりしていると、どんどん遊び食べるの習慣が付いていき、なかなか食べることに集中できません。食べることに集中しながら、幼児になってきたらお話を楽しんだり、いろいろなことをするのですが、その生活のルールの中に、今は何をするときとか、ここは何をする所ということも備わっていくのです。ルールというのは子どもを縛り付けるためにあるのではなく、ルールを理解すればもめ事も少ないし、怒られることもないし、自分で考えて行動することがたくさん増えるということで、とても重要です。そういう五つの力を、もう一度自分たちの保育の中でしっかりと見直してみようというのがこの表にあることです。

4. 乳児保育の基本

ここから資料に基づいたお話をします。子どもたちが日々保育所で過ごしていく時間の中で、乳児期に大事なことは安心感と信頼感、自信という、この三つです。その後ずっと、自分が生きていく世界に安心感を持つことができるか。自分を取り巻いている大人に信頼感を持てるかどうか、自分に自信が持てるかどうか、この三つが乳児期に育ててあげたいものです。

4-1. 自分が生きていく世界に安心感を持つ

子どもは大人と違って人生経験がほとんどないわけですから、初めてお父さんやお母さんと離れて保育所に来て、長時間たった一人で知らない人の中にいるということは、大人が想像する以上のストレス、不安がいっぱいあります。

泣いて当たり前で、泣かない子の方が不思議です。僕は泣かないと少し心配します。「泣いていいんだよ」と言います。皆さんが初めて行った外国で、知らない所に一人で放り出されたときに泣きたい気持ちになる、そういう感じです。言葉も通じない、知らない人ばかり、どうしていいかわからない。大人は

まだ、ある程度、自分で解決できるけれども、子どもは自分で解決できることはほとんどありません。非常にビクビクしながら、不安で、気を付けていないとかまれたり、たたかれたり、ひっかかれたり、そんなことも起こってくるわけですから、そこでこの三つが大切になります。自分が生きていく世界が安心できる所かどうか。それにはまず秩序ある生活の組み立て、安定した日課とともに、保育所が家庭的だということとはとても重要だということです。

4-1-1. 日課の重要性

まず、日課がとても大事です。日課とは何かというと、0歳は本当に週ごとに発達の様子が変わっていきます。午前睡がなくなったり、排せつの間隔が少しずつ伸びてきたり、食事の時間が変わったり、哺乳期から徐々に普通食に変わっていったりする中で、寝る時間が長かった子どももだんだん起きている時間が長くなっていく。そして、個々にリズムを合わせてあげるのだけれど、大きくは、だんだん集団のリズムに慣れていくように、社会生活に慣れるリズムを作っていかなければならないのです。

子どもの生活リズムは、ただ単に規則正しい生活をするというのではなくて、それぞれ年齢に応じたその子の持っている生命リズムがあって、例えば0歳と1歳と3歳と5歳では全然違うわけです。生活リズムの軸になる一つに睡眠時間がありますが、一般的に大体3～6歳ぐらいまでの子どもは、夜は生命リズムからいくと8時ごろに寝て、7時ごろまでの11時間ぐらい幼児の睡眠は必要だということです。

ですから昔は日本でも、親は8時になったら「もう寝なさい」と子どもを寝かしたものです。今はそんなことは社会的に難しいのですが、世界的には子どもたちは7時半から8時半ぐらいに寝るというのは常識ですが、日本と中国、韓国、アメリカあたりは非常に子どもが起きている時間が長いという統計が出ています。特に11時以降に起きている子は日本が一番多いのでしょうか。それぐらい子どもたちの生活リズムが崩れているわけです。

学校は8時半に始まります。これは昔も今もそうです。僕が子どもの頃も学校は8時半始まりでしたが、僕が小学校に行っていた頃は毎晩8時に寝ていましたから、学校に行く8時半には十分に睡眠時間が充足して、目が覚めてからきちんと朝ご飯を食べて学校に行ったので、今で言う「早寝・早起き・朝ご飯」がしっかりと守られていたわけです。今は遅寝・早起きで朝ご飯を食べないで

学校に行くような状態ですから、学校では非常に落ち着かないだろうというのがよく分ります。毎晩10時まで起きているのなら、10時に始まる学校があったらいいのですが、そういうところはないのです。そういうような意味で子どもの生活リズムが崩れてきているなどと思います。

安定した日課というか、1日の生活の流れが安定していることで、先を見通して自分で考えて行動することができます。例えば、うちの保育園は今二つで、まどか保育園と先ほどの保育園なのですが、もともと「まどか」の方は朝7時から夜8時までの13時間保育です。公立を引き受けたところは、今までは朝7時半から夜7時までの11時間半だったのですが、民営化の条件が朝7時から夜8時半までということで、一気に2時間保育時間が長くなって13時間半保育が義務付けられています。夜7時まで在園する子どもと夜7時以降8時半までの子どもは扱いが違うので、遅い子どもには晩ご飯も出すという夕飯付きの保育になっています。公立はそれをやらないのですが、民営化した民間だけが押し付けられてそういう形になっています。また、公立はやらないのにもかかわらず、統一献立を押し付けられるので、夜ご飯を保育園で作るのに、夜まで保育をやっていない公立の保育所の栄養士が計画を立てた献立を民間で作るのです。

例えば、この前、僕が試食をしたときに、晩ご飯のおかずがフライドポテトと鶏の唐揚げとおつゆとご飯でした。フライドポテトと鶏の唐揚げが来たら次はビールです。これが晩ご飯なのという状態で、少し驚くような献立です。今、幕内さんという方の『変な給食』という本が出ていますが、あれなどは今の学校給食がいかに変かを紹介していてすごいのです。これはどう見ても居酒屋メニューだなという給食が全国の学校にいっぱいあるのですが、保育所も同じようだと思ってびっくりしました。そういうことで8時に寝るなどということはとても不可能です。

今、まどか園には夜8時半までの子は1人しかいないのですが、去年民営化されたところは夜8時までに食事を出している子どもが20人ぐらいいると聞いて驚きました。今、当園は1人しかいないのですが、1人の子どもに4食を作ります。試食とその子が食べる分と、保存食と展示食です。税金を湯水のように使っているなど思っている状態です。

そんな中で保育をしますから、生活リズムを取るのが非常に難しいのです。8時に迎えにきた子どもを9時に寝かせるなどということは不可能ですし、8

時半までだにご飯を食べて帰るのですが、二十何人いるところの話を聞いたら、帰ってからもう一回食べる子が多いそうです。お母さんたちは帰ってから食べるわけですから、やはりもう一回一緒に食べたいわけです。非常に健康に良くないと思うのですが、こういうのも保育の質を上げるということで保育時間を長時間にしていくことに関わるのかと思うと、よく分からない部分があります。

こども園構想なども、基本的にはそこにいる子どもたちの立場で考えられていることはほとんどありません。預ける親の場合は、そのシステムやお金のことはみんな言いますが、そこで13時間小さな子どもが過ごすことに対して、それにどういう意味があるのかをどこで誰かが真剣に考えているのかと思います。その子たちの人生の将来に誰が責任を持つのかと思うのです。

うちの保育園は朝9時までに登園ということをお母さま方をお願いしています。ほぼ100%、9時までに全員来てくれます。自由登園にしているところで、9時半から10時ぐらいの遅い時間に来る子どもは問題を持っている子どもが多いのです。家庭の生活リズムが崩れている子どもは、保育園で落ち着かない、攻撃性がある、偏食が激しい、午睡しない、遊べないという問題を持っていて、そういう子どもは大体遅型登園の子どもに多いといわれます。すなわち、生活リズムが家庭と現場でつながっていないとなかなか難しいということです。

そういうことで、今、9時までの登園をお願いしていて、9時になったら外に行きます。7時から9時の間は、朝なら部屋で過ごします。過ごすというのは「何をしなくてはいけない」のではなくて、過ごすのです。部屋にいて、ゴロゴロしていてもいいし、遊んでいてもいいのです。しかし、9時前になったら準備して、9時になったら0歳から幼児まで全員外に出ます。0歳など外に出られない赤ちゃんなどは外気浴をするので、全部窓を開けて風通しを良くします。2歳以上はレインコート、長靴で遊べる程度の雨だったら、雨でも外に出るようにしています。傘をささなければいけないほど強い雨では出しませんが、レインコート、長靴で行けるのだったら、少々雨が降っても基本的には外遊びに連れていくということをしています。

乳児は10時ごろ、幼児は10時半まで外で遊んだら、今度は部屋に入って、お昼ご飯まではお部屋で遊ぶという時間です。今度は部屋で過ごすのではなくて、部屋で遊ぶという時間ですから、そこではお部屋の中にあるいろいろな遊びのコーナーで、自分の好きな遊びを自分で見つけて遊ぶというのが基本です。乳児は大体11時過ぎから片付けて、食事に随時入っていきます。0～1、2歳児

は基本的には一緒に食べるということはないので、登園時間に合わせて、2回ないし3回ぐらいに分けてとか、まだ一人できちんと座れない子どもは一人ひとり抱っこするなどして食べさせています。杓の付いたいすに座らせて、3人ぐらい並べて、えさをやるようにして食べさせるようなことはしません。

いすに座れない子どもは、いすに座れる体がまだできていない子どもなので、いすに座る体を作るには背筋とか頭を支える力などが必要です。そういうものがきちんできていない子どもをいすに座らせるのは、歩行器に入れるのと同じように決して良い状況ではないので、いすに座れるようになったらいすに座る。それまでは抱っこしてというのが基本ということになります。

1対1からスタートして、食事を丁寧に介助してあげることで、食べることに集中し、一番大好きな人がいつも食べさせてくれるという中で安心感を持つのが食事です。こここのところをないがしろにすると、後で話をする反抗期などということが出てくるのです。幼児は11時半から40分ぐらいで片付けに入って、その後、絵本を読んでもらって、12時から食事です。乳児は12時にはもう午睡に入っていったって、14時には起こすという状態です。

14時半には全員起きて活動をし、15時におやつを食べて、少し落ち着いたら、もう一回外遊びに行つて、外で遊んだらお部屋でお迎えを待つというように、行事や特別なことがない限り、この日程を毎日繰り返します。

先ほど言ったように、その日の天気でどうなるか分からない保育所の子どもに「保育所に行ったらどうするの」と聞いたら、「今日行ってみないと分からない」と答えます。先生の都合でどうなるか分からないし、お天気でどうなるか分からないし、行事があるとまたどうなるか分からない。今日は外で遊べるか、お部屋で遊べるか、それも行ってみないと分からないといった生活ではなくて、当園は「保育園に来たらどうするの」と聞いたら、「9時までお部屋でいるのだけど、9時になったら外遊びに行くんだよ」という生活をしているのです。雨が降ってもレインコートで行けるくらいだったら外で遊ぶし、その後、お部屋に戻ったら、今度はお部屋で好きな遊びをして、11時半ぐらいになったら先生が本を読んでくれるから、そこでみんなで集まって、幼児たちが本を読んでもらっている間に横でもう一人の大人と栄養士さんたちが配膳をするので、12時になったらすぐに手を洗って「いただきます」で食べられるという流れは1年中通してずっと同じとなっています。

だから子どもたちは、今、何をするのが非常にはっきりしているの、例

えばお部屋で遊んでいるときに、「外に行きたい」という子どもは、「だって9時になったら全員行くのだからね。雨が降っていても行くよ」という状態だったら、今はお部屋に居ればいいのだと分かるわけです。外遊びの時間になって、もっと部屋で遊びたかったけれど、外に行くんだ。でも大丈夫、11時になったらまた帰ってくるから、そこでまたここで遊べるからねというように、毎日生活の流れがしっかりできていると、今やることにより集中できるのです。だから、次は何をするかということも自分で考えて行動の準備ができるようになってくるのです。

4-1-2. 秩序のある生活の組み立て

もう一つは、「秩序のある生活の組み立て」ということです。これは安定した保育室の空間づくりや生活の中の基盤がきちんとできているということです。例えば、皆さんのところで、食事のときに席を決めているところと自由に座らせているところがあると思います。少し手を挙げてみてください。圧倒的に決めているところが多いですね。

決めているところは「なぜ決めているのか」、逆に決めていないところは「なぜ決めていないのか」が大事です。保育はいつも「なぜ」なのです。例えば、おうちでご飯を食べるときは自分の席は不思議なことに決まっていますよね。誰がいつ決めるのだろうかいつも思っているのですが、お父さん、お母さん、子どもはここというように決まっています。今日、帰って、自分の席ではない所に座って食べるとどんな気持ちになるか。一回やってみられると、非常に落ち着かなくなります。だから、「好きにしていよいよ」というのは、子どもにとって落ち着かない状態、不安な状態になるということです。

決まった席に座らなければならないのではなく、あなたの席はきちんと保障されているよということです。自分の場がしっかりあるということは子どもにとって安心感を生みます。お昼寝のときの布団を並べる順番、「何とかちゃんの隣は誰々ちゃん」と決めているところは手を挙げてください。決めていないところはありますか。みんな決まっていますか。食事の席が決まっていないところは、大体寝るところも決まっていないのが普通ですが、これもやっかいで「今日、どこに寝るのだろう」と思います。

どこの家に行っても、早く帰ってきた人から奥から順番に寝る家はないです。だから、自分の寝る場所だって、当然、決まっています。生活とは

そういうものです。靴を入れる所、かばんを入れる所、着替えが入っている所、いろいろな場所が決まっているから、毎日あちこち探さなくても、自分はこのこと分かっていることが非常に安定感につながってきます。これを秩序と呼んでいます。決まっていないのは、自由ではなくて無秩序な状態です。

おもちゃもいつも決まった所に置いているのか、おむつ交換するのも、きちんと決まったおむつ交換する場所があって、そこで替えてあげる。泣いたらどこでも替えるのではなくて、きちんとおむつを替える所で替えてあげるので。どこでもトイレというのはおかしいというのと同じです。

子どもたちが自分の生きている世界には決まりがあって、きちんと自分たちはそれを守ってもらえる。そういったことが分かってくると非常に安心できるのです。しかし、行ってみたら、毎日何をするのか、その日の大人の都合で決まっていたり、ご飯を食べる所や着替える場所、寝る所やいろいろなことが、もし毎日毎日違っていたら、それはとても生活ではありません。「保育指針」の最初に、「保育所は生涯にわたる人間形成の最も重要な時期で、最も長時間生活をする場である」と書いてありますが、それは1年中、避難民のような生活をしていると考えていいと思います。

お昼寝にホールにいっぱいござを敷いて寝ているところも、年中避難民生活をしていると考えてもいいので、決して良い状態ではありません。そのときに、例えば、クラスとクラスの間にきちんと衝立があるとか、クラスごとに少しブロック分けをすると少しは変わりますが、ざっと敷かれているということであれば、すごく落ち着かなくて、そこで「寝ろ」と言われてもなかなか難しいです。特にホールは天井が高いです。地震のときでも体育館に避難した人たちは、期間が長期間にわたると非常に情緒が不安定になって自律神経がやられるそうです。やはり天井が高い体育館は生活には適していないのです。そういったことも問題の一つです。

4-1-3. 家庭的な雰囲気

「家庭的な雰囲気」ということでは、昔は保母と言っていたのですが、今は保育士となって、何となく冷たくなった気がします。保母という言葉は第二のお母さんという感じがあります。これは保育の根源に関わる問題なのですが、子どもを教えたり、指導をするのではなく、子どもが自ら伸びていこうという力をどう助けてあげるか、子どもが自分の力をうまく発揮できるような良い環

境を提供するという、環境提供と援助が保育の最も重要な仕事で、決して先生ではないという、そこが重要で。

こども園構想で僕が非常に引っ掛かるのは、よく「教育の一体化」という言葉が出てくるのです。今日の資料の中でも就学前の学校教育と保育という言葉が使われています。学校教育法の中では幼稚園は学校でくくられて、学校扱いなのです。幼稚園は学校、保育所は社会福祉、児童福祉施設で、日本で「福祉」というかわいそうな子どもがいる所という感じです。それを一本化しようという考え方になっているわけですが、幼児教育とは一体何なんだろうというのが実は重要なわけです。学校と同じように字を教えたり、算数をやらせたり、学校でやることを少し先取りして早くやるのが教育だとすれば、これは非常に大きな過ちです。今、日本の教育がOECDでやっている国際教育テストで成績がかんばしくなくて、フィンランドや韓国など、いろいろな国に抜かれています。

韓国は日本の何倍も上回る強烈な押し付けの教育がもっと徹底しているから、あのテストで良い点が取れるのだと思います。しかし、フィンランドでは世界で一番学力が高い教育が行われていますが、世界の小学校の中で一番授業時間が短いのです。つまり短い授業時間で、非常に効果の上がる学習をしています。なぜ、それができるかという、受験体制のための勉強という考えが全くないから、学ぶことが楽しいということで、子どもたちの勉強に対するモチベーションが全く違うのです。小さいころからひたすら受験のために勉強をさせられたら嫌になるに決まっているのですが、いろいろな経験を積んだり、家族や親子でいっぱい楽しんだり、学校でもそういう知識を教えるだけの授業ではないという社会全体の在り方があるのです。また、世界で一番読書が大好きという国民性もあります。やはり見習うべきはフィンランドかなと思います。一番授業時間が短くて、一番成績が上がるのであれば一番いいのです。

ここ数年、フィンランドの幼児教育を毎年見に行っていますが、なかなか面白い教育だなと思うところと、やはり押し付け教育的だなと思うところと両方あります。しかし、本当にまじめな国民なのだということを感じます。学校に行く前の子どもに、コンピューターのゲームなどは全く持たさないし、フィンランドは世界で二つだけ、小学校以下の子どもが携帯電話を耳で当てて使うことを法律で禁止している国です。電磁波の影響を考えると、子どもにとって危険性が高いということで、携帯電話を使う場合はイヤホンを使わないと駄

目と法律で決めている国です。そういう部分ですごくまじめな国民なのですが、別に堅いわけでもなく、学校に行っても、すごく子どもたちが自由で、日本の学校の雰囲気とすごく違うのであっけにとられました。

保育所で一番驚いたのは、皆さんよくご存じのキシリトールというのがありますよね。虫歯を防ぐためにという。あれはフィンランドが発明したらしいのですが、フィンランドの保育所はご飯を食べた後にキシリトールのガムをかむのです。それで歯は磨きません。面白いなと思ったのですが、みんな家からガムを持ってくるのです。ムーミンなどの絵が描いてあるガムのケースに入れて、食事の後にみんなガムを食べているのであれっと思ったのですが、どこに行っても、みんなキシリトールガムを食べているのです。それで虫歯がないのであればとてもいい気がします。

先生が子どもに教えるのではなく、子どもが自らいろいろなことに興味や関心を持って知的好奇心を持ち、いろいろな面白いこと、楽しいことをやって、一人ではなくてみんなで喜ぶということが非常にいいですね。保育士の服装も自由で、第二の家庭といった感じです。「最も長時間生活をする場である」と指針には書いてあるのですから、ジャージで保育するというのは全く家庭的ではありません。体操学級のように変かなということ、まずジャージは絶対にやめよう、普通の服装でいいということです。エプロンは食事のときだけしますが、普通のときは普通のお母さんもしないから、エプロンはしません。

また、名前というのはとても大事なことで、子どもが「先生」と言うから、どうしても「先生」と言うけれども「私は〇〇という名前がきちんとあるし、みんなも知っているし、名前あるよね」ということを大事にするので、子どもは〇〇ちゃんとか、〇〇君とか、きちんと呼んであげて呼び捨てはしない。「お友達」といういいかげんな呼び方はしないようにしようと思っています。また、大人同士は特に自分自身のことを子どもに対して、「先生」と言わないことを決めています。

恥ずかしいからそういう言い方はやめよう、人に向かって自分で自分のことを先生と言うほど、「あなたはそんなに偉い人なの」とこちらも聞きたくないので。いつも自分で「先生」と言っているうちに、先生目線で上から子どもを見下ろす保育にならないように、自分のことは「私」と言うようにしています。子どもは「先生」と言うのですが、最初に「私」と書いたら、子どもが「私」と呼ぶのです。私は私だけれど「私」という名前ではないと言っているのです。

しかし、大人同士も「ゆかりさん」「のぞみさん」と名前で呼び合っていると、「ゆかり先生」「のぞみ先生」と呼んでくれます。保護者の方は大体「ゆかり先生」とか「先生」は付けますが、きちんと名前であげてくれます。保育室も学校の教室ではないので、黒板などは絶対にあってはよくないし、殺風景で汚れたものではなく、温かく過ごしやすい保育室を作ろうと考えています。自分がこれから生きていく世界はとても大事です。

4-2. 自分を取り巻く大人に信頼感を持つ

大人を信頼して、大人にあこがれて、大人を尊敬して、あの大人のようにになりたいという気持ちを小さいときに持てた子どもは人間としての成長がうまくいくのです。良いモデルに出会えた子どもはすごく幸せです。子どもにとって、お母さんもモデルですが、保育士もまたモデルです。

そんな中で、担当制について考えてみましょう。基本的には人間関係には2種類あって、広い関係と深い関係というこの二つを私はつくってきました。深い人間関係をつくろうと思うとある程度狭くしないといけないし、人間関係を広げると必然的に浅くなります。広く深くは絶対に両立しません。ですから、人間の関係というのは、まず深い方からスタートして、それを広げていくというのが基本です。いきなり広い関係からスタートしてしまうと深い人間関係をつくる力が非常に弱くなります。子どもにとって家族、あるいは親というのが一番深い関係です。次に保育所に来ると、自分の担当の担任の先生と自分の関係になります。次はクラス全部、それから保育所全体の保育士との関係みたいな感じです。

上尾保育所の『死を招く保育』の中で、その4歳の男の子が食事のときにいないのです。食事のときにお皿が一つ余っている。ご飯の入った食器が1個余っている。「誰がいないのか」というところから始まるわけです。席が決まっていなかったから、誰がいないかを把握するまで少し時間がかかるのです。一人ひとり名前をチェックしてみたら、その子がいないということが分かるという感じですが、そこからまず恐ろしい状況です。

次に保育士が探しにいった。ざーっと見てきたのだけど、どこかにいるのかと思っただけです。おかしいなと思ってすぐにみんなに声を掛けて探し始めるのだけれども、ひょっとしたら家に帰ったのではないかと、散歩から帰る途中におばあちゃんに会ったから、ひょっとしたらおばあちゃんの家には勝手に

行ったのかなという話になりました。しかし、げた箱を見ると靴はあるので外に行ったはずはないと思うのですが、混乱してくると、ひょっとしたら裸足で出掛けたかもわからないとか、そんなことを思っ、て、おばあちゃんの家までも手分けしてみんなで探しにいこうと言うと、「その子の顔と名前が分からない」という保育士が5人ぐらいました。

つまり、120人ぐらい子どもがいると、乳児担当は幼児のことが分からないとか、幼児担当は乳児が分からないということになるのです。今年6月に起こった事件なのですが、今年異動してきばかりの人は、自分のクラスの子どものことで精いっぱい、よその子は名前も顔も分からないという、同じ環境の中にいながら、そういう状態が現実起こったということです。自分の園の子どもたちの顔と名前を全部言えない保育士など、僕らの常識から言うと考えられませんが、毎年、引越したりしているとそういうことがあるのかなという気もします。乳児グループと幼児グループが交ざることが少ないと、そういうことは難しいことかもしれません。

子どもからすると、みんなが自分のことを見てくれているのではなく、特定の決まった人が絶対にそこにいてくれる安心というのが非常に強いのです。それはお母さんと子どもの関係で強いのですが、保育所に来れば今度は担当保育士さんと自分との関係ということです。例えば0歳に入りました。保育士は4人います。4人はいつもにこにこしているけれども、自分が本当につらいときには誰が見てくれるのかな。お腹が空いた、熱が出たときに誰が見てくれるのかなと分からなかったらやはり不安です。

同じ人がいつもやってくれると、その人が部屋にいるというだけで全く安心感が変わってくるのです。そういう意味で、平成2年度に改定された保育指針にある「特定の保育士と子どもの関係をしっかりとつくる」ということが乳児保育の中で非常に言われてきています。それまでは逆に、いろいろな人が関わった方が子どもの人格が豊かになるとか、特定の人の癖がつかない方がいいと考えていたのです。しかし、人の癖がつかない子どもは、障がいを持っているか何か問題があります。つまり、人見知りする子どもの方が正常な子どもで、誰が抱いても全く大丈夫とか、構わなくても機嫌がいい子どもがいたら注意しなければならぬわけです。そういう子どもは情緒的に欠陥がある可能性が大変高いのです。この人でないと駄目ということが分かる子どもは情緒の発達がうまくいっていると考えていいわけです。

4-2-1. 担当制について

そういうことから平成2年度の保育指針の大改訂の中で、「担当制」という言葉が出てきます。しかし、いまだにこの担当制ということははっきりと定義付けられていません。この前の5月に東京であった保育学会で、去年、今年と学会発表を共同研究でやっているのですが、そこの担当制の分科会のようなものに当園の職員たちが話を聞きにいった、全く話がかみ合わないから途中で帰ってきたそうです。そこでは食事担当、おむつ交換担当というのが担当制なのです。僕はそれは分担制と呼んでいて、担当制ではないのです。仕事を取りあえず分担してやっているのです。食事担当と育児担当は全く違います。

なぜ担当制が必要かという、保育所に来ている子どもが、その人がいることによって安心できるというその関係をしっかりとつくるため、大人の仕事が楽なように分担していくわけではないのです。このことがまず非常に重要なのです。

その中で特に、食べることと寝ることと排せつすること、この三つが人間が生きていくために絶対に必要な生理的な要素ですから、この三つを決まった人が見てあげるといことで子どもは満足するのです。しかし、眠るということ、子どもの生命維持のための眠りというのは夜間の睡眠のことであって、保育所の睡眠は午睡なので、午睡は仮眠なのです。だから、私たちは仮眠については担当制を外しています。

睡眠の担当はお母さんです。いつも家で決まった人が見てくれているわけです。保育所のお昼寝は仮眠なので、仮眠するのにわざわざパジャマに着替える必要はないのです。世界中どこに行っても、家で遊んでいる子どもが昼寝をするときに「今からパジャマに着替えて昼寝します」という習慣はありません。だから、当たり前のご飯を食べて、そのまますぐに布団に入る、あるいはベッドで横になる。絵本や紙芝居もしないで、着替えもしないでそのまますぐに横になるという形を取ると、非常に自然な入眠が起こります。なぜかという、食事をした後じっとしていると胃に酸素がどんどん取られるので、脳が軽い酸欠状態を起こして眠くなるという、これは人間の体の仕組みなのです。

大人でもそうですから、子どもはもっとです。子どもと病気の人とお年寄り、食後にすぐに横になるというのが、一番健康にいいわけです。食べてすぐに横にしてあげると、すぐに寝ることは寝ます。ですから、わざわざボンボンして寝かさなくてもいいのです。それを食事が済んだら遊ばせて、時には紙芝居

で興奮させて、そしてまたパジャマに着替えさせて、散々「起きろ、起きろ」とやっておいて、今度は無理やりとんとんして寝かせるというのは、行動的には「起きろ」という行動をやっているのに、保育士は寝ろと言う、子どもにすると全くわけの分からない状態です。

前に朝日新聞の記者が関西版で「きしゃきしゃ走れ」というようなコラムを書いて、自分の子育てのことを書いておられました。どうも西宮の公立の保育所にお子さんを預けていた方ようです。家でおばあちゃんが見てくれていたのですが、2歳になって、ちょっと大変になってきたし、おばあちゃんも年なので保育所に預けるということになったのです。自分の子どもは2歳になったときには毎日夜8時から朝の7時から7時半までぐっすり眠るので、1歳だけど昼寝はよほど疲れたときしかしないという状態で、その代わり夜8時になったらことんと寝るというリズムだったのです。

保育所に預けたら、保育さんが「お昼寝しないので困ります」と言うようになったのです。それで説明したのです。毎晩8時には寝るし、時には8時前に寝ることもあるし、大体11～12時間寝るから、あまり寝ないと思うので強制しないでほしいと言ったら、「それは困ります」としよっちゅう言われて、子どもはそのうちに保育所に行くのが嫌だと泣き始めるのです。行ったら「お昼寝、お昼寝」といつも言われて、しないと怒られるから、保育所に行くのが嫌だと言うのです。

お母さんはまた何回も呼び出されて、何とかしろと言われるのだけれども、何とかとはどうすればいいのかということになって、結局、相談してみて、お昼寝をさせるように夜ふかししたらいいのではないかとということで、毎晩10時まで起こしておくようにしたら、きちんと昼寝ができるようになったのです。そしたら、保育所の担任から「やればできるじゃないですか」と言われたのだけれど、これはどうも変ですよと書いてあるのです。もちろん僕も全く変だと思うわけです。午睡は必要な子は寝るし、必要でない子は寝ないのです。しかし、休憩はどの子も必要なので、食べたら横になっていてと言って、「眠くなかったら、無理に寝なくてもいいけど、みんな寝ているから静かにしようね」というふうにしてあげれば一番いいと思うのです。

年長になって12月、1月までお昼寝させていたら、学校に行ったときにぼーっとしているという生活になりますから、そんなことは絶対にやめた方がいいのです。ですから、年長になれば基本的にはお昼寝は要らないだろうと思うので

すが、そういう部分を含めて、睡眠というのは家庭の睡眠が軸で、あくまでもそれを補てんする形で午睡があります。

食べること、排せつすることは生きることに直結していますから、いつも同じ人が食事の世話をしてくれて、いつも同じ人がおむつを替えてくれるというのは子どもにとって安心できるということです。泣いたらいつも誰か手の空いている人がお世話をするのではなく、いつも決まった人がやってくれる状態です。場所も決まっていて、人も決まっている、これが一番安定しています。

4-2-2. 大人の人間関係

子どもが大人との人間関係を安定させ、大人に対して信頼関係を持つには、その前に大人同士の人間関係が安定していないといけません。保育所における園長、主任、保育士、あるいは栄養士や調理師、看護師含めて、保育というものに対してどう一体化するかです。例えば時間差配膳の問題です。まだか保育園では、先ほど言いましたように1歳から3回に分けて食べているので、早い子で11時10分ぐらいからスタートします。その子たちが大体15～20分ぐらいの食事で終わると第2グループというようにして、登園時間を主に基調にして生活時間を若干ずらしています。

あとは月齢、家庭の睡眠時間などを聞きながら、少し早く眠くなる子どもは早いグループにということを中心にして担当グループを作るのですが、どの子どもも温かいものを食べさせたいので、1回目、2回目、3回目と分けて、最後の子がいつも冷たいものを食べているのは絶対に良くないということで、ご飯は炊いたものはジャーに保温する。おつゆは調理を3回に分けて3分の1ずつ作って、温かいものを食べる。

おかずもできれば温かい方がいいのですが、これを時間差でやるのは難しいのですが、栄養士さんも自分も何とか温かいものを食べさせたいということで、15分ごとに温かいものを出すという時間差配膳というのを完ぺきにできるようになった状態です。しかし、栄養士さんの協力がなかったらもちろんできません。千葉市では幼児は昼食を家から持ってくると決まっていたのですが、みんなが温かいものを温かいうちに食べられる様、私たちは絶対に何とか給食にしたいと頑張りました。最初は持ってきたご飯が冷めるのでホットキャビネットに入れて温めていたのですが、やはり炊き立てご飯がおいしいよねということで、保育室に1升炊きの大きい炊飯器を入れて、11時半にご飯が炊き上がるよ

うにセットしています。遊んでいるとご飯の炊けるにおいがどんどんしてくるので、みんな「あーご飯のにおい、おいしそうだな。お腹が空いた、お腹が空いた」と、ここで五感を使うのです。すごく重要なことなのですが、において食事がすごくはかどるのです。

もう一つ、園と保護者の関係が安定していないと、子どもは大人を信頼できません。今回見事に痛感したのですが、公立から民間に変わって、変わるということでものすごく不安があるわけですから、それはよく分かるのです。しかし、練馬区が書類審査、現場審査と面接というか、プロモーションを経て選定委員たちが採点していくわけです。私たちは14か所の保育所の中から選ばれたのですが、今までの練馬区の中で最高得点で選ばれました。その選んだ理由も広報で練馬区のホームページに公開されるので、僕もそれを読んで、非常に空間の使い方、手作りのおもちゃも充実していて、保育士が非常に穏やかで、子どもたちも非常に穏やかである、子どもにとっても、親にとっても理想の保育所と言うことができるというところまで評価してもらいました。

にもかかわらず、従来の練馬区の保育をそのままやれと押し付けられて、僕は「もう降ります」と言ったのです。それでは意味がない、そのままやるのだったら民間に任せないで、そのままやられたらどうですかと言ったわけです。自分たちが選ばれて、民間に仕事があるということは、民間の持っているものを分かったからでしょう。ホームページで当園はこれだけ褒めてもらいました。その良い保育を少しでもお母さんたちと共有していきたいと引き受けたのですが、それをやるなと言われたのならもうできないということで一回降りると言ったのですが、「いやいやそう言わないで」とスタートしたら分かっていたできました。

お母さんも不安はありますから、毎日、連絡帳に苦情を書いたり、いろいろ言う方もいらっしゃいますし、変わったということをものすごくいいと褒めてくださる方、さまざまです。家具から部屋の模様替えも全部したのです。4月1日の日曜日に、今年は引き継いで良かったねと、1日は朝から夜中2時ぐらいまでかかってみんなで保育室をきれいにして、2日からきちんと迎えようとしたのです。子どもたちはもちろん増えたし、保育室はきれいになって見やすくなったとすごく喜んでくださるお母さんたちもたくさんいる反面、何かよく分かりませんが、いろいろな苦情を言う方もいらっしゃいました。

実は苦情を書いたり、いろいろとおっしゃるお母さんのお子さんが結構

大変なのです。保護者は園に対して反感を持っているし、当然、子どもはそれを家で聞いていますから、保育園に来てはこちらの言うことを聞かないのです。そういう状態が続くので、保護者との関係が良くならないとすごく難しいです。しかし、まどか保育園ではそういうことをすごくしっかり作っていて、僕がこの前感動したのは、練馬区の父母会のホームページがあって、民営化されるとこんなにひどくなるから民営化に反対しましょうみたいなことが書いてあったのです。僕も読んでびっくりしたのですが、こんなに反対されている所に僕は来たのかと思って少し勉強不足だったなと思ったのです。

しかし、まどか保育園の保護者でそれを見た方がいて、自分のところの子どもを見てくれた保育士さんの何人かが「さくら保育園」に移ったのですが、「さくら保育園って大変だよ。こんな状態のところに行って先生たちがすごく苦労をしているよ」と言って、皆さんが大きな模造紙に卒園した子どもたちも含めて寄せ書きを書いてくれたのです。そして、「すごく大変でしょうけれども頑張ってくださいね」というのと、「保育園の側に対してお母さんが反発があって大変だというのだったら、親同士が話をすればもっと分かってくれるかもしれないから、もし時間と場所を取ってくれたら必要なときに私たちがいつでも行きますから」とおっしゃってくれたのです。

そこまで関係ができてくると、子どもは保育園がとても安心できる場所になるのです。まどか保育園の子どもたちは本当に保育園が大好きで、今年も卒業した小学校6年生の子どもたちが四つぐらいの学校から卒業式の日には保育園に遊びにきてくれてすごくうれしかったのです。

もう一つ難しいのは、園の中の関係づくりです。保育士同士、あるいは園長、主任とか、これが一番難しいのです。どこに行っても大人というのは気を合わせて仕事をするのはなかなか難しいなと思います。けれども、できないことはないと思います。少なくともまどか保育園では高い評価でできていると思うのは、唯一の方法があるからです。それは、園の方針がはっきりしていて、保育観を一つにしていくことができれば、大人の人間関係は自然に良くなるということです。

園長の考えていることと下の考えていることが違うとか、同じクラスの担任同士で違う保育観があるといった状態が一番子どもから見てもやっかいで、そういうところにいる子が不安定な状態になるのです。保育について話し合い、保育観をしっかりと一つの方向に向けるということを研修やいろいろなことで

やっっていかなければいけません。そのためには、特に園長のリーダーシップが非常に重要です。しかし、公立は園長先生が3年毎に任期を終えてしまうのでリーダーシップはなかなか難しいです。現場をまとめるのが大変だなという状態もよくあり、最終的にはいろいろな問題が起こっても誰が責任を取るのかわからない、あいまいな状態になってしまうのが一番やっかいだなと思います。

埼玉の上尾保育所の本を読むと、本当にひどいと思います。事件がその年の6月に起こって、裁判になって、その年の3月に全員が配置転換されるのです。その保育所にいた人は全員どこかに飛ばされて、その事件を市はもみ消そうという状態です。親はいろいろな調査が入って原因がはっきりしない限り、また同じことが起こるかもわからないから、それだけはきちんとやってほしい。それがせめてもの亡くなった自分の子どもへの供養になると思っていたのですが、全員飛ばされたのです。こういうことをすると誰も責任者がいなくなってしまいます。そして、園長先生と担任2人は逮捕されたのです。個人として裁判で裁かれて有罪判決を受けています。今はそういう事件があると、保育士が個人的に完全に罪を背負わないといけない状況になってきているのでしょうか。

私たちは保護者の方に言ったのですが、さくら保育園で126人の子どもの命を預かるのはわれわれであって、自分たちが一番信じている保育をやらないと、よそのやり方で子どもが死んだからといって、そのやり方をやっていた人たちが責任を取ってくれるわけではないのです。ここから出ていった人たちはもう一回帰ってきて誰も責任を取ってくれないから、子どもたちに対しても責任はわれわれが全部を負っているということを説明して、こういうことが大事なのですよという話をしながら保育をしている状態です。

4-3. 自分に自信を持つ

4-3-1. 注目されている実感

「注目されている実感」はすごく大事です。子どもたちは「見て、見て、見て」とすごく要求します。言葉で「見て」と言える子は「見て」と言うし、言えない小さな子どもは泣くとか、いろいろな方法を使って自分を「見て、見て」というのを出します。注目されているということが、子どもにとって、自分が今ここにいるということを肯定的にとらえることになるのです。つまり、ここにいるいいのだな、自分は愛されているな、自分は大事にされているのだなと

いう感覚が得られるわけです。とにかく「見て、見て」というのは、それだけ自分が不安定で見られていないと感じているということです。

数年前に秋葉原で8人の人たちを見境なく殺人した事件がありました。「誰でもいいから殺してやろうと思った」という有名なセリフがあります。心理学者は、彼は子どものときにみんなからきちんと「自分が見守られている」と注目されている実感を持つことができなかった幼児期を過ごしていると断定しています。多分半年後だったと思います。友達は彼女がいたり、仕事があったりするのに、自分は仕事もなくなって彼女もいない。そして、「来てほしい」と派遣会社から言われて会社へ行くと、「手が足りなかったから」と言われた。自分でなければいけないというわけではなく、ただ手が足りなかったから呼ばれただけなのです。誰も自分のことを見てくれていないし、大事にしてくれていない。「誰でもいいから殺してやろうと思った」というのは、「誰でもいいから注目してほしいから、誰でもいいから止めてもらいたかった。でも誰も止めてくれなかったから、自分はこうやって殺したのだ」ということを裁判で言っています。

非常に怖いことです。だから、子どもたちの「見て、見て、見て」ということは、自分が生きているということを自分で確かめたいためなので、絶対に必要なことです。新年度になると、「見て、見て」の行動で一番目立つのが、泣く、くっつくの二つです。もう一つ、大声を出している幼児がいます。「先生」などいつも大声でしゃべっている子がいます。こういう子どもは本当は「見て」ということです。大きな声を出すと見てくれるから出すみたいな状態です。現実、大きな声を出さないと見ない保育士がいると、どんどん声が大きくなっていきます。

そういう部分で、言葉を手渡すというのは私たち保育の基本なのです。「○○ちゃん、ご飯よー」とこちらから言うのではなくて、その子のそばに行って「○○ちゃん、ご飯だよ」と手渡してあげると絶対に受け取ってくれます。

こちらが投げかければ子どもも投げ返してくれるし、こちらが手渡すと向こうも手渡してくれます。いつも大声で叫んでいる保育士がいると子どもも大声で叫ぶので、叫び合うことになるのです。叫ぶのは非常事態のときだけにしてほしいのです。普通にはいつもの声で話ができるようにしていきたいと思います。

お誕生会はその子にとって1年に1日、1回しかない、一番大事な日です。その日を何月生まれのお友達にまとめて祝うのは絶対にやめて、その子の生ま

れた日にきちんとやってあげる。30年ぐらい前からこの話を始めてだいたいその日にやれるようになったと思っています。

名前は先ほども言いました。もう一つ大事なことは、名前を言った後に悪いことを言わないようにしましょうということです。「○○ちゃん、何でそんなことをするの」「○○ちゃん、やめなさい」というのではなく、「○○ちゃん、ありがとう」「○○ちゃん、よくできたね」「○○ちゃん、そうしてくれるとすごくうれしい」というように、ぜひもう一度見直してください。保育者は大体、名前を言った後に悪いことを8割、いいことを2割ぐらいしか言わないのです。だから、子どもたちは「この先生、1日、僕の悪いところばかり探しているのかな」という気になります。「○○ちゃん、よくできたね」とか「上手だね」とか、「○○ちゃん、ありがとう」。ありがとうはすごく大事な言葉なのです。

4-3-2. 達成感を感じる

育児で達成感とは、食べさせる、寝かせる、あるいはおむつを履き替えさせる。食べる、眠る、そして、排せつするという子どもの主体的な行為を、まだ子ども一人ではできないので、大人が少し助けてあげるという感覚です。だから、おむつを替えてあげるのではなくて、排せつを手伝う。だから、両足首を持ってびゅっと引っ張り上げておむつをぱっぱと替えるなどというのは絶対にやらないと決めています。何か死んだニワトリではあるまいし、両足首持ってぶら下げるのではないみたいな。「おむつ替えようね」と言葉をかけて、「足を上げるよ」と言いながらゆっくり足を上げてあげて、「おむつ取るよ」「お尻上げてくれる」とか言葉を掛けていくと全部やってくれます。ぱっぱぱと30秒ぐらいでおむつを替えると、子どもは自分の身の上になんか何が起こったか分からないうちにおむつが替わってしまう。これは作業と呼びます。人間には作業をしてほしくありません。

食事で大人が子どものスプーンで食べさせるときも、口の前でスプーンを待てば、自分から食べにくるから、それに対して少し手伝ってあげると、自分でスプーンを挟み込んで上あご、下あごできちんと取り込むのです。それが待てないでギュッと入れて、あっと上唇を擦り付けるように抜いて子どもがのけぞるみたいなことをやっていると、自分から食べようという気持ちはなくて、いつも食べさせられているという状態になってきます。

あるいは、「外に行くよ」と言った途端に腕を持って引っ張っていかれるのと、

「行くよ」と言って指を出して持たせるのでは全く違うのです。「行くよ」と言って、いきなり連行されたような状態になってしまうとよくありません。「いすに座ろうね」と言った途端、両脇に後ろから手が入って体が急に空中をワープして、気が付いたら座っていましたみたいなことをされると、自分でできたという満足感も自分でやりたいという気持ちも全部壊されてしまうのです。

あるいは外に出るときに靴を履くのであっても、少し履ければ子どもたちは自分でやりたいし、せめてまずはマジックテープを止めるぐらいから始めた方がいいのです。それをとにかく作業的にばっばとやって、「はい、外に行くよ」みたいに作業をされていると、いつも子どもは物として扱われているので、そこに自分という人格や主体性は全くなくなります。実は保育というのは、歌を歌ったり、手遊びするだけでなく、そういう一つひとつが子どもにとっては成長していく非常に重要な部分になるのです。また、乳児の場合は保育の大半は育児の部分です。どちらかという、大人が子どもを少しお手伝いしてあげて、「自分でできたね」というプロセスを作るのが保育の基本なのですが、そのところを、どんどん大人が食べさせて、寝かせて、おむつを替えさせて、腕を引っ張って、抱っこして育てたりしていると、自分の仕事は楽に流れるかもわかりませんが、少し待ってあげている時間に子どもは発達するということが分からないのです。

「ちょっと自分でやってごらん」と大人が待っているときに、子どもが一生懸命やってくれたら、そこに一つの発達があるのに、待たないでどんどんこちらから作業をしてしまうのは保育ではなくて、保育労働というものです。本当に保育士が保育労働者になってしまうと非常にやっかいな部分が出てきます。保育はその点で特殊な仕事だと思います。

4-4. 遊びの重要性

遊びというのは子どもの最も主体的な活動です。自分がやりたいと思うことを自分が見つけてできるようにしてあげる。そして、できたという達成感、成功感を得る。

今からビデオを見せながらお話をします。

〈保育所での好ましくない事例〉

○例えば、ある保育所で撮った危険な食事です。眠りかけている子どもに無理

やり食べさせると、のどに詰まらせて死ぬ可能性があります。

千葉県船橋市で1歳児がのどにご飯を詰まらせて死んだという事件がありました。22歳の若い保育士さんが1対1で食べさせていたのに、のどに詰まって死んだという事件が起こったのですが、そういうことから、やはり子どもは怖いと思っています。寝ている子どもはもう、一度食事を止めないといけないうつも思っています。

○「しないで」という言葉掛けも何か怖いと思います。この子どもたちを見ると、1対4で大人の関わりができていない、まだ食べる力が育っていないと思うのです。それで集中できない。大人が見るべきところをきちんと見ていない。子どもはにこにこしながらやっているから楽しい。いかに笑顔で対処できるかが重要ですね。スプーンでたたいたら、「ちゃんと食べようね」と笑顔で言ってあげればいいわけで、そこで「しないで」と怒らないといけないうの意味が分からない。保育は笑顔で言ったら伝わるのがいっぱいあるのですが、そうでないと逆の効果になります。

○これはさらにひどい状態で、いすに幽閉されているからどうしようもないわけで、口にねじ込んでいる。ほとんど窒息してもおかしくない状態ですね。

やや極端な例かも知れませんが、1対1でやっているから丁寧だというのはないのです。結局、丁寧さは常に保育士の心にあるので、非常に難しいと思います。

○これは乳児の食事です。

子どもたちが一人の人間としてどこまで大切にされているか。いわば子どもの人権がどこまで守られているかということになるのですが、いつもそういうことは難しいと思っています。悪気があってやるわけではないと思うのですが、集団で一度に食べさせると、一つひとつの大人の行為が、今、この子の気持ちになっているのかはすぐ疑問ですね。

雑巾で物を拭くみたいに身体を拭かれています。何で人前で裸にさせられるのでしょうか。何でもかんでも手でつかんで食べているので服がぐちゃぐちゃなのは当たり前です。服を脱がせている人も子どもをほとんど見ないでやっていますね。

○いろいろな言葉に大人はどう気を遣えばいいかみたいところで、例えばこれはうちの保育園なのですが、2歳児の子どもたちが年度の後半になると全員一緒に食べるので、グループが二つになります。それぞれ一人ずつ大人がいるのです。

○もう一つ、やはりテーブルが二つ、これは少人数でやっています。二つのテーブルなのですが、保育士の位置が全く違うのです。ここでは2人が同じ方向を向いて座っているのですが、ここでは大人が両側に向かい合って座っているでしょう。座るときに、どこに座るかということについて結構、話し合いがなされているのです。つまり、どちらか1人が立っても、全部子どもが見える位置に2人が座っているわけです。そうしないと、1人が背中を向けてしまうと、後ろの人は前の人立っても全部見えるけれども、前の方は後ろの人が立っても見えないので、後ろのテーブルが全く見えないで困るわけです。乳児の食事なので、何が起きるか分からないからそういうところを考えて位置取りをしています。

子どもというのは大人の背中をずっと見ていると不安になるのです。顔が見えてると安心します。たったそれだけのことで、大した労力が要るわけでもない。子どもの気持ちになって少し考えることができれば、割とそれは簡単に解決できることなのです。

ここからはまだか保育園の事例を紹介します。

〈まだか保育園の事例〉

○例えば0歳保育の日課は、7時から順次登園があって、室内遊びがあって、9時半から外へ出ます。その後、室内遊びがあって、食事があって、午睡があってというように大きな流れができています。これは基本的には年間変わりません。

5月の終わりぐらいにクラス懇談会をします。そのときに4月からの子どもの遊びをビデオで撮ってお母さん方にお見せします。それ用に撮ったビデオです。

歩き始めの子どもです。例えばツーッと車が前にいって、手前に体重がかかっても、絶対に手前にバタンと倒れない仕掛けが付いています。ドイツの押し車で右左、右左という足を順番に出していく、それがすごく上手にできるように

なっています。倒れないけれども、絶対に真っすぐにしか行かないので、行ったら、またUターンしてくるのです。

○さらに、ここは2階ですが、テラス、ベランダのような所です。0歳児がまだ小さいときは下の園庭まで連れていくのも難しいということで、2階に遊び場を作ってあります。

ちょうど1歳になったのです。これは市からの補助金をもらったのでできたのですが、乳児用としては世界で一番のものです。外遊具は大体幼児用で、乳児用の外遊具は少ないのです。それなりの値段はします。コンクリートの上に2.5cmの防音マットを敷いて、その上に人工芝を敷いているので子どもが絶対にけがをすることはありません。

幼児と一緒になるとこういう遊びが多くなりますから、やはりそういうのをきちんと守ってあげないといけないと思っています。

○これは部屋のテラスのすぐ横が外ですが、テラスから出入りできないようになっています。ぐるっと回って、ここに散歩がてらよちよち歩きながら来るという形を取っています。緑のじゅうたんを敷いています。当園の最初の散歩はこれなのです。

○こういう遊びから始まって、今度は部屋の中の遊びです。室内遊びもいろいろあるのですが、例えばかくれんぼ遊び。これはかくれんぼ戸棚というのを作っています。下を開けていますから、この中に入っても絶対に外から見えるのです。自分で隠れているつもりという遊びをします。

○自分ができたことをきちんと見てくれている人がいると、もっと見せたい気持ちになるのです。このUの字型のクッションは、一人座りも十分できなくて、後ろに倒れたりする子のものです。あちらに動いたり、こちらに動いたり、自分で結構、調節ができています。

この子はちょうど満1歳になったところですが、小さな子どもはすごく考えたり、集中したり、しっかり物を見たり、何かしようとして、そのたびに体を使うことができるわけです。いつも0歳児の部屋で、抱っこばかりしている人を見ると、「少し遊ばせてあげて」と言いたくなるのです。何かやっていると

どんどん成長していくのです。抱っこしたら駄目というわけではありませんが、抱っこばかりでなくいっぱい遊ばせてあげることが大事です。

○手作りのおもちゃです。やはり乳児は、特に0歳児などは手作りおもちゃが結構たくさん要るので作らなくてはいけないと思います。もう少したつとままごとなどでもできるようになって見立てが始まります。ちゃんとコップに入れるというのを見立ててやります。月齢がちょうど1歳ぐらいです。明らかに見立てができたのです。こういうように少しずつ少しずつ大人がやっているのを記憶して、そして自分の頭で覚えたことを再現していくのです。

○頭だけ振るのは結構難しいのです。まねっこできる子どもは頭がいいのです。しっかり見て覚えています。覚えたことをどんどん子どもはやります。

大人がずっと笑顔で関わってくると、子どもも自然に笑顔が出てきます。笑顔がたくさん出てくる子どもは性格が絶対に良くなってきます。だから、乳児の保育士はむっとしていない人はいけないのです。常に子どもを見て笑顔を見せてあげないと表情ができてきません。すごく大事なことです。

わらべうたを基本にずっとやっているのですが、子どもたちは本当に大好きだし、いろいろな遊びをします。0歳はまだ絵本の読みみかせは少ないですが、それでも少しはやっています。

○2歳の初めぐらいになれば、絵本は全部、見えているけれども、自分で出してはきません。子どもが自分で出して見るというのは、2歳のクラスになって、様子を見ながらだんだんそうしていくのですが、子どもは別に悪気はないのですが、ちぎったりかんだりしてしまうことが多いのです。それをあまり注意したくないし、大人が大切に扱っていることをしっかり見せてあげて絵本の扱い方を教えてあげたいと思います。その辺の床に散って、それを平気で踏んで歩いている子どもがいるのを大人が何にも言わないでそのままにしておくというのは決して良い環境ではないと思います。

○生活のところですが、少しだけお見せします。

朝の受け入れです。受け入れ室は保育室の外側に建て増して施設を造りました。朝、お母さんやおばあちゃんが来ると、着替えを入れたり、連絡帳を入

れたり、おしほりを渡したり、着替えを入れる袋を掛けて、最後に保育園用の布おむつにお母さんが替えて、それで出勤します。子どもたちは全部が済むまで保育室の隣にいます。そうしますと、向こうで待っている間に、保育室の中に既にいる子どもや保育士を見て、早くそちらに行きたくなくなっています。

保育士はこちらに迎えにこないで、必ずこの入り口に座って待っています。お母さんが全部やってくれて、おむつも替えてくれた。さあ、これから自分の保育園の時間だということで、ここは自分の足で1日をスタートさせるぞとなっているので、本当に飛び込んできます。そうやって自分が飛び込んだから、気持ちがもう保育園に行ったので、お母さんはあっけないぐらいです。非常に理想的なスタートです。泣いている子どもがいると、お母さんは1日中子どもの声が残っているだろうし、子どもは子どもで置いてけぼりになって、1日調子が悪くなってしまいます。朝の受け入れの時間はすごく大事だと思っていて、わずか5～6分の時間なのですが、保護者の方はみんなそれを理解してやってくださいます。

○9時になると、準備をして外に出ます。広い場所ではありませんが、乳児は乳児の遊び場があって幼児とは違ってきます。

○ちょうどいい感じで止まってくれた松を木登り用に置いてあるのです。必ず大人が付いています。また、高さ1mぐらいの遊具の外側を回るというのも必ずみんながやりたがるので、できるようになったら1回やらせてみます。子どもにとっては大冒険なのです。下は砂場ですから、万が一落ちてでも絶対にけがをしません。ここ数年、子どもたちがけがをして保育園の保険などを使ってやる治療というのは全くないです。できたよという満足感みたいなものがありますね。

○部屋に入ったら好きな遊びでお人形のおむつを替えてあげたり、あるいは他の遊びをします。この子は1歳児です。ガッツポーズをしています。できたら、元あった棚にきちんとこれをしまっ、次の遊びを出します。こうやって1歳児が自分で使ったものを全部きちんと戻すというのも習慣付けができています。

○もう既に配膳されていますね。ここでエプロンを着けて手を拭くというのを先にやっておいて、座ったらすぐに「いただきます」をして食べるようにしましょう。座って前に食事があるのに、そこで待たせてしまわない様に座る前に準備をします。

子どもたちは毎日の流れが分かっているので、遊んでいた子どもがきちんと自分から来て座るのです。それで「どうぞ」と言うと、もう迷うことなくきちんと自分の席に行きます。実はここでゴタゴタしないように、この座っている順番でここにも座らせるのです。だから、子どもは交差しないですと座れます。だから、ここで座る席の隣が誰と決まっているから、遅れてきた子は、真ん中の子でもちゃんと体を寄せて中に入れてあげます。決まっていなかったら、ここでまず席の取り合いでけんかが起こってくるというのが普通なのですが、全くそういうことはありません。

○これは1歳児の12月に撮ったビデオですから、後期なのです。隣のテーブルも既に配膳されています。スプーンですくい切れるスプーン用の食器を使っています。お皿のふちが垂直に高く丸くカーブが付いているのですくい切れるのです。このお皿に出会ったことで本当に助かりました。主食のパンと二つのおかずとおつゆとがあります。

○こちらは食べ終わっていますが、食べ終わったら口と手を拭いています。途中で遊んでいる子がいても、そこをきちんと通過して自分の席へ行きます。エプロンは自分で引張ったら脱げるようになっています。必ず最後のところまで横に大人がいてあげて見てあげます。食べ終わって寝ている子もいれば、食べている子もいるという状態です。一斉に15人が大体50分、よくかかって1時間以内に全員の食事が終わって、お昼寝に入ります。

こういう生活習慣を作るためには、日課と秩序のある生活をしっかりやっていくことです。毎年こういったことが繰り返されて、いろいろなことを自分が考えてできるというところまで来ます。

○どこの保育所でも今は結構荒れている子もいるのですが、当園でもやはりこういう状態があります。この子は2歳児です。入ったばかりの子どもで4月2日に撮ったビデオですが、入園前からどういう子かは分かっていました。こん

なことをやるなというのは分かっていたので、保育士は子どもをしかつても分らないので遊びの方に集中させようということで、ただひたすら遊びへ遊びへと子どもを誘っていくわけです。しばらく座って遊ぶということができるようになったら、遊んでいるうちにまた次の段階へというわけです。

5. まとめ

これをご覧になって分かるように、子どもというのは、しかつて育つというものではありません。どうすればいいかを常に子どもに伝えながら、生活に見通しを持たせ、見守ることをしっかりし、日常の生活に丁寧にに関わり、言葉を一人ひとりに掛けていくことが大事です。

そして、遊ぶための環境をやはり作らないといけないので、絵本やおもちゃ、自分たちが必要なものを自分たちでリストを作って、それに沿って予算組みをしてそろえていくので、園で買ってくるものをクラスに与えるということは基本的にしていません。

みんな自分の1年間の必要なおもちゃのリストを作り、遊びの計画を立て、絵本も年間絵本計画というのを立てて、何月にどういう本を読むというのは基本的に決まっています。「今日は何を読もうかな」という生活は絶対にしないのです。もちろん、その様子を見て、もっと読みたかったのにあまり乗ってこないからやめるといこともありますし、新しい本が途中で出てくることもあるけれども、ベースは全部作ってあります。

そういうように、生活と遊びを通して、日々、子どもたちが身に付けていくということが大事なのです。本来、幼稚園や保育所が何もなかった時代には、子どもはほとんど家庭と地域社会で育っています。近所の大きい子や小さい子が一緒に遊ぶ中でいろいろなことを学んだり、親だけではなくたくさん大人の愛情を持って見守る中で育ってきたのですが、今、子どもにそういう場所がなくなってしまったのです。昔と環境的に違ってきています。保育所の中では、それを大事に考えた保育をしていかないといけないと思います。

大切にされることを通してしか人を大切にすることは学ぶことができません。しかればしかるだけその子は自分より弱い者を見つけて攻撃するというパターンに入るのは間違いがありません。そして、子どもに対していつもしからないといけないというのは、環境が十分に整っていなかったり、保育の組み立

てがうまくできていなかったり、あるいは子どもをしっかり見ていなかったりということが圧倒的に多いのです。それをしっかりやっていると、子どもがやっていることが一つ一つ全部意味があるということが分かってくるから、やはりそれに対して担任同士が話し合い、大きな問題は園長・主任も含めてみんなで話し合いながら進めていこうと思っています。

どんな小さな子どももきちんと人格を持った一人の人間としてそこにいます。だから、自分たちがされて嫌なこと、大人がされて嫌なことは子どもにはしないという、まず当たり前のことを大事にしてください。例えば食事をしているときに、まだ食べている子がいるのに、残飯の処理をしたり、食器をがちゃがちゃ片付けたり、自分が食べていてそれをされると嫌かなと思うのですが、そういうことを保育所ではすごく雑にやってしまうのです。自分は布団の上を踏んで歩いているのに、子どもがしていると叱る。「えっ、でも先生も踏んでいるけど」と子どもはそう見るのです。つまり、常に大人はモデルになっているのです。子どもにしてほしいように大人もしなければいけません。昔の人が言うように、子どもは言ったように育たないけれど、大人のするように育つというのは本当だと思います。

そういう意味で、もし子どもが荒れているとしたら、その荒れているのは子どもではなく、保育の組み立ての問題であったり、保育士の問題であったり、保育所全体の方針の問題であります。そういうように考えていくと、絶対に子どもたちは変わってきます。私は100以上の保育所と関わっていますが、どこでも今見たのと同じような状態を3年間ぐらいで作り出すことができます。そんなにかかるのです。

3年たつと0歳が2歳になり、3歳が年長になります。6年たつと全部が変わります。だから6年たつとほぼ定着するのですが、一つの方針をしっかり立てて、見通しを持った保育にしていかないと、ころころ大人が変わって、年度が変わるごとに人が替わり、人が替わるごとに法律が変わりみたいな状態になってくると、いつまでたつても自分の正しい生き方を学ぶことはできません。

学校に行ったら、否応なしにやりたくないことをやらなくてはいけないこともいっぱいあります。学校は学び、学習の場であり、保育所というのは生活の場です。ここで非常に重要なことは、乳幼児期、特に乳児期、未就学時代の子どもの学習は、原則、生活と遊びの中にあるのです。その中で集中したり、考えたり、観察したり、記憶したり、再現したり、あるいは、一番重要な、知的

な活動だけではない、人との関わり方、自分の心の使い方を学べるのです。6歳までのこの時期を逃がしてしまうと非常に難しいというようなことがあるのです。

今、幼保一元化の中で非常に怖いと思うのは、保育所というものは決して養護だけをやっているのではありません。養護そのものが一つ非常に重要な教育であって、教えることだけが教育ではありません。幼稚園とはそうなのです。保育所ではそういうことはやっていないから保育所の方が後れているという考え方は全く間違っていると思います。学校に行く前に文字の読み書きや何かができたからといって、学校に行ったときに人の話が聞けない、集中できない、ルールが守れない、人と仲良くなれないというのでは困ります。

頭の中に多少の知識を持っているぐらいのことは、1年生後半になったら誰でも知っていることを少し早くできるだけのことです。

いわば学校に行く前に少しぐらいの貯金を持っていても、大事なことは学校に行ってから貯金をする力なのです。それはさっきの五つの力です。人の話を聞く、集中する、ルールを守る、良い人間関係をつくる、五感をいっぱい使う。これを幼児期にしっかりやってあげないと、学校に行ってからではなかなか身に付けることはできません。そういうことを日々、非常に感じているところです。そういう観点から、もう一度保育を見直していかなければいけない時期が来ているなという気がします。